

はじめに

名古屋大学の各学部における創立年はまちまちです。たとえば、医学部は前身の仮病院・仮学校が作られた一八七一（明治四）年においていますし、経済学部は同じく前身校である名古屋高等商業学校が設立された一九二〇（大正九）年を創立年としています。名古屋帝国大学（旧制名古屋大学）になってからできた学部では、工学部は理工学部が発足した一九四〇（昭和一五）年、理学部は理工学部が分離した一九四二（昭和一七）年、文学部は一九四八（昭和二三）年、法学部は新制後の法経学部が分離した一九五〇（昭和二五）年です。新制大学になつてからでは、教育学部が一九四九（昭和二四）年、農学部は一九五一（昭和二六）年、情報文化学部は一九九三（平成五）年を創立年としています。

ただ名古屋大学全体としてはその創立を、名古屋帝国大学が発足した一九三九（昭和一四）年においています。東京・京都・九州・東北・北海道・京城・台北・大阪につづく九番目の、そして最後の帝国大学でした。この名古屋帝国大学草創期は十五年戦争中でもあり、資金人材などさまざまな面で苦難の連続でした。本書は、この名古屋大学の草創期Ⅱ名古屋帝国大学の

時期について、その多くの期間を初代総長として務めた渋沢元治の努力を交えながら、紹介していきたいと思います。なお記述の都合上、本文中の敬称を略しています。また「澁澤元治」が正しい名前ですが、ここでは一部の名称を除いて「渋沢元治」の表記に統一しました。

一 「名帝大けふ誕生」

◆総合大学への道

名古屋に総合大学を招致しようという動きは、一九一八（大正七）年ごろから本格的にはじまりました。それまで官立（現在の国立）の帝国大学しか認めていなかった大学枠を緩和する大学令が施行されたことが大きな要因でした。この時期の日本は、第一次世界大戦による好景気もあって、都市に人が多く集まり、従来の市街地の周りに新市街地ができ、都市空間が飛躍的に拡大していきました。そこにサラリーマンなどの都市中間層が居住し、彼らや彼らが働く企業を中心として教育への要求が高まり、それに対応した教育諸政策が実施されましたが、大学令の制定もその一つでした。